

紀要

第 13 号

2000. 3

財団法人滋賀県文化財保護協会

# 近江觀音寺城の存在形態

村井毅史

## 1. 緒言

湖東平野の中央、標高434mの繖山に築城された觀音寺城は16世紀中頃には東西1000m、南北700mの規模を有していたとみられる。これは全国的にみても屈指の大規模山城で、江南においては他に追随を許さない巨大な城郭であった。また石垣の使用においても同時期の他の城郭に比較して高い技術を誇っている。

にもかかわらず16世中葉の城郭としてその評価はそれほど高くない。これには、縄張の中心が定め難いこと、山頂とこれに続く尾根部分に曲輪が無いこと、城域が斜面に設けられた平坦地の連続で防御意図が明確でないこと等が挙げられている。

村田修三氏はこのような状況を再検討し、城内を結ぶ幹線道路の計画性の高さ、尾根筋を削り出した土壘と、城の内外を結ぶ幹線道路に設けられた見付（虎口）で城域全体を防御する発想が根底にあることを指摘されている。<sup>10)</sup>

觀音寺城の発掘調査が実施されたのは昭和44～45年度で、伝本丸跡、伝平井丸跡、伝池田丸跡が調査された。<sup>11)</sup>

最近では觀音寺城の周囲でも発掘調査が進み、觀音寺城を廻る考古学的成果も変化しつつある。また16世紀を中心とした大規模な城郭の発掘調査や研究も盛んになっている。そこで本稿ではこれらを視野に入れつつ、觀音寺城の構造の再評価を試みた。

## 2. 城域の構造（第1図）

觀音寺城は繖山を利用して構築された城郭で、様々な面で自然地形の影響を受けている。そこで本節では繖山の自然地形から城域を区分し、觀音寺城の様相について触れたいと思う。

1. 山頂部（M1～5） 山頂部は周囲を急斜面によって囲われた5つの平坦面からなる。北端に位置する平坦面M1の北側には土壘が、北東隅に位置する平坦面M2の東辺には石壠が設けられ、北端に

は虎口が開く。西端に位置する平坦面M5の西辺には石壠が、平坦面M5とその東に位置する平坦面M4の南側には高さ4mの石垣と、これに開かれた虎口が、南東に位置する平坦面M3の東辺には土壘、南東隅には虎口が開かれている。よってこの5つの平坦面は纏まとった単位を形成しているとみられる。

虎口は東尾根からの取り付きに位置する虎口a、南東隅に取り付く虎口b、南面に開口する虎口c、西尾根からの虎口dがあり、それぞれ石垣・石壠を伴っている。

以上のように山頂部の5つの平坦化地は一つの単位として周囲から防御上独立し、単独で城郭として機能し得る主郭としての要素を全て備えていたとみられ、少なくとも觀音寺城の防御上の核として形成されたものと考えられる。

規模は東西130m、南北幅30～60mである。

2. 西尾根部（W1～4） 山頂部から西に延びる尾根上に形成された4つの平坦面を中心に構成される。西尾根部はW1～3の上段と、W4の下段の2単位にわけられる。

山頂部と西尾根部上段との間には自然地形が残り、両者は一体性が強いとみられる。ここでは尾根筋を削り出しこの上に石壠を加え、L字形の土壘を形成しており、北面に2箇所、南西隅に1箇所、西面に1箇所の虎口が認められる。

下段（W4）の平坦面は本城（本丸）と伝えられており、城内最大の平坦面を形成している。下段の土壘はW4を西面から南面にかけて囲繞しており、上段土壘の南端と、下段土壘の北端は虎口によって切断されるが、連続性が認められ、或る程度の一体性が指摘されている。

3. 東尾根部（E1～5） 山頂部から東のピークである奥の院に至る尾根上に造成された削出土壘と、これより南に向かって延びる、削り出し土壘より派生する土壘及び南面の切り岸によって区画された5つの平坦面からなる。



第1図 鏡音寺城の地形と構造 ( $S = 1/5,000$ ) <村田修三氏原図「五個莊町史」第一卷付図に加筆>

全体的に石垣の使用が少なく、古い段階の趣きが残されているとみられる。

平坦面 E 4 と E 5 の間には尾根筋の土壘を切断する堀切が設けられている。

また E 4 の東面土壘の南端には、北続きを石垣で固められた虎口 j が設けられている。

また南からは南斜面上部への唯一の導入ルートが設けられており、この最上段には、西を崖、正面を切岸で囲まれた、一辺 3 m の踊り場状平坦面が設けられており、階段から右折して入る樹形状の虎口 k と呼称する。

先述したように、尾根筋を削りだした土壘は E 4 と E 5 の間を堀切によって連続性を断たれている。

また虎口 j は石垣を伴っており、新しい段階のものとみられる。

よって城域第Ⅲ部は、E 1 ~ 5 までが一連の領域を形成していた段階と、E 1 ~ 4 と E 5 の2つに分離された段階にわけることができる。

**4. 南尾根部 (S 1 ~ 5)** 西尾根部の先端から南に向かって延びる尾根上を中心に形成された平坦面を基軸に構成される。

尾根上の平坦地面は尾根付け根の曲輪 S 1 から、先端の曲輪 S 5 迄、200m 近くにわたって高さ 4 m の石垣が積まれている。

この中央北より、S 1 の南には伝宮津口見付を開く。

伝宮津口見付 1 は、間口 53m の巨大な虎口である。また S 1 の南正面出入口も間口 4 m あり、城内の平坦面の出入口としては最大のもので、これに用いられた石垣も最大級である。

S 5 は発掘調査の結果ほぼ透き間無く建物が建てられていたことが判明している。

**5. 南斜面上部** 西尾根部、山頂部、東尾根部の下に拡がる平坦地群で、現観音正寺迄を呼称する。上下の平坦面を繋ぐ石段がほぼ真っ直に通り、或る一定の企画のもとで形成されたことが窺える。よって上部は主曲輪東直下の平坦化地に存在したとされる伝元観音寺本堂の下に展開することから、恐らく元観音寺の坊舎施設をそのまま転用したものと考えられる。

**6. 南斜面中部** 南斜面上部の下に拡がる平坦地

群で、現観音正寺から關迦坂見付迄までを占める。上下の平坦面を繋ぐ石段がほぼ真っ直に通り、或る一定の企画のもとで形成されたことが窺える。ここには観音正寺から南斜面の平坦地群に下る階段が 3 本設けられているが、その間は約 92~93m とほぼ等間隔で、この部分に規格が存在したことを窺わせる。

**7. 南斜面下部** 南斜面中部の下に拡がる階段状の平坦面群から、本谷見付迄の谷地形を呼称する。

本谷見付の復元は村田修三氏の研究による。<sup>210</sup>

**8. 東部** 東尾根先端部、権現見付 p、關迦坂見付 r より東を呼称する。自然地形の影響を受けた不定形な平坦面が階段状に連続するが上下の連絡も不明瞭で、南斜面上・中部とは趣きを異にし、南斜面下部と同様の傾向が認められる。

### 3. 観音寺城の変遷と構造

前節の観察から観音寺城の構造上の変遷を捉えることが可能となったとみられる部分が見出された。本節ではこれをもとに観音寺城の変遷を推測してゆきたい。

#### ◎観音寺城以前

観音正寺の坊舎を状況に応じて臨時に城塞として城郭に転用していた段階で、南斜面上部がこの時期の状況を残すとみられる。

南斜面上部は上下の通路が直線的に通らず、平面形状も不定形であり、平坦化地造成前の旧地形の影響を強く受けているとみられ、また石垣もほとんど使用されいない。よってこの部分がこの時期の様相を最も良く示すとみられる。

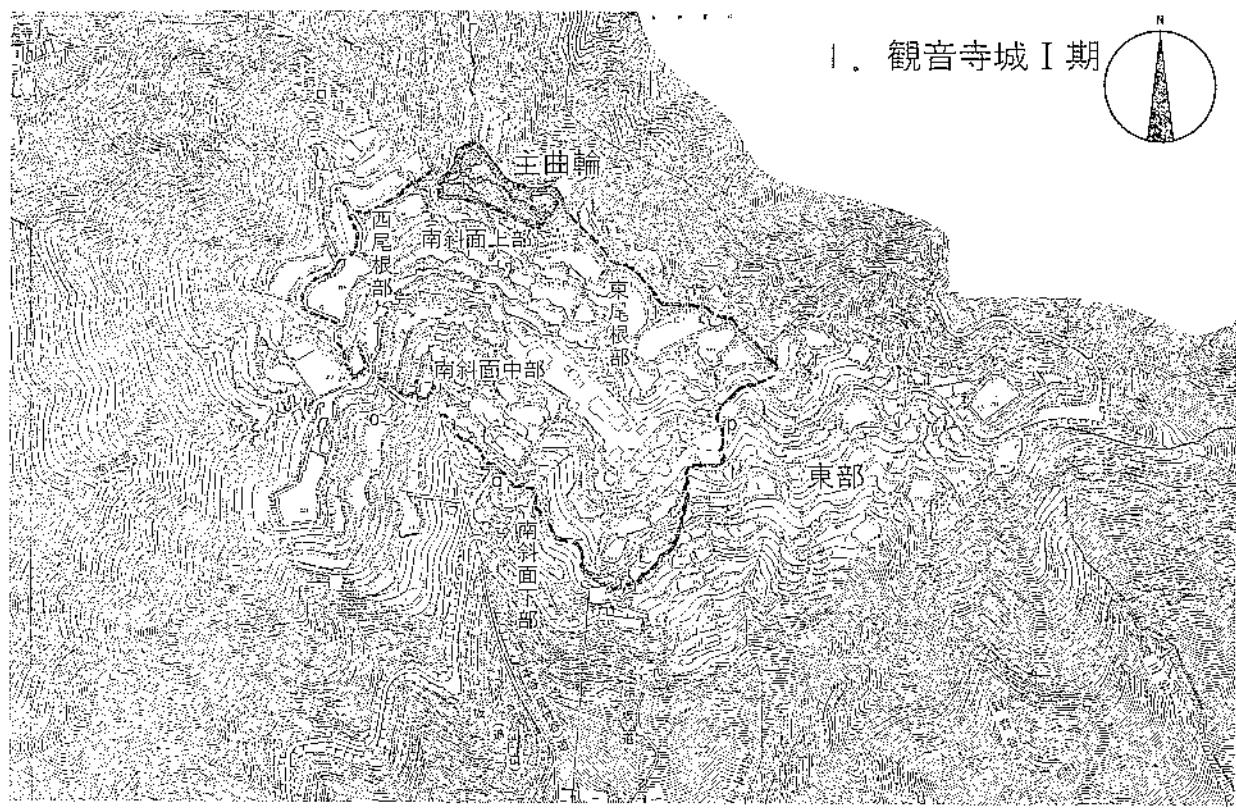
#### ◎観音寺城 I 期 (第 2 図 1)

現況のプランが確立する以前の状況を観音寺城 I 期と呼称する。城域は山頂部、西尾根部、東尾根部、南斜面上・中部を中心に構成されるとみられる。

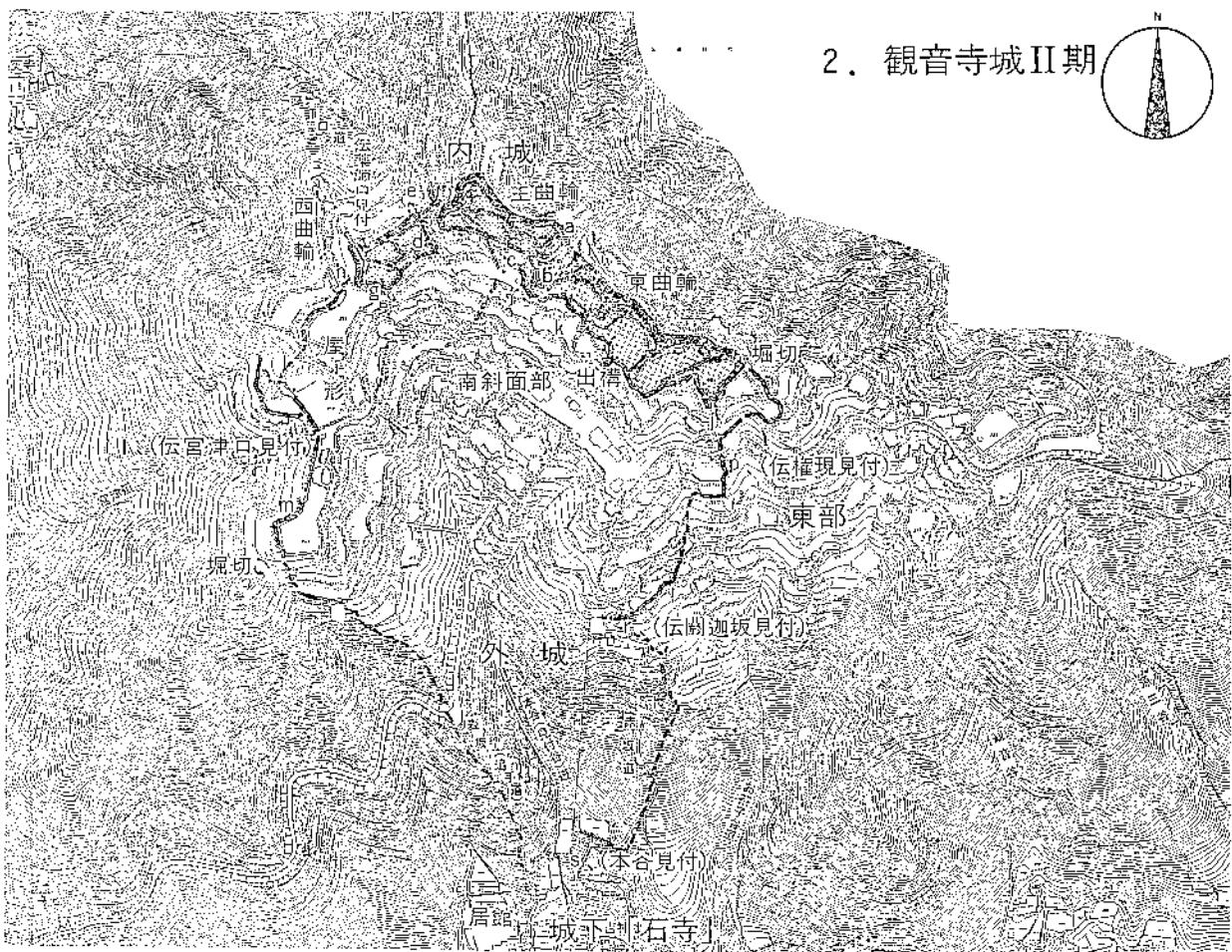
城域の周囲は、西尾根部では山頂部から削出土塁が延び、W 1 ~ 4 迄の尾根上削平地列の北側を囲み、南端は W 4 の虎口 i で止まり、上を小平坦地、下を堅堀に挟まれた o も虎口の痕跡とみられる。

東尾根部では山頂部から削出土塁が東のピーク ‘奥の院’ まで延び、これを E 1 ~ 5 の平坦地の北側を囲む。E 4 と E 5 の間の削出土塁を断ち切る堀切と、虎口 j はこの段階では未だ形成されていなか

1. 観音寺城Ⅰ期



2. 観音寺城Ⅱ期



第2図 観音寺城変遷図 (S=1/8000) <村田修三氏原図に加筆>

ったとみられ、Ⅱ期とは異なり尾根上は土壘によつて画された一連の平坦地列であったとみられる。

南斜面上部では下辺の東端に位置するⅡ期の虎口 p の位置に E 5 と組み合つた虎口が存在したとみられる。

南斜面中部で本谷からの虎口は、南辺中央の本谷から上がって突き当たつた岩盤で東に折れ、スロープを上がりきつた q が南斜面中部中央虎口の痕跡とみられる。南斜面中部南東隅には虎口 p と q の関係から、虎口 r がⅠ期まで遡るとみられる。

よつてⅠ期の城域は山頂の内城、北側の尾根を削り出した土壘、南側の虎口 i・o・p・q によって防護された外城によつて構成され、その外側に南斜面下部、東部が存在していたとみられ、城域の中心が北に偏る同心円構造を採用していたと考えられる。

虎口 q に至るルートは老蘇から直線的に延び、城下石寺を縦断し本谷の扇状地に上がり、そのまま谷を北上する。このルートは老蘇から、八日市を経て八風街道を通り、伊勢の桑名に出、太平洋岸航路に接続する。これは六角氏が重要視していた街道でこのことから、虎口 (q) は観音寺城Ⅰ期の大手とみられる。

### ◎観音寺城Ⅱ期（第2図2）

現況のプランがほぼ確立した段階である。

観音寺城Ⅱ期の年代は、W 4 や S 1・5 等から出土した土器から16世紀中頃とみられる<sup>140</sup>。

観音寺城Ⅱ期は、①-主曲輪東西の尾根上平坦化地列のうち、西尾根部の W 4 以下を切離し、W 1～3 で西曲輪を形成した点。東尾根部の E 5 を掘切で切離し、E 1～4 で東曲輪を形成した点があげられ、これによつて主曲輪の東西を東曲輪、西曲輪に編成し直して、城郭中心部を拡張し、中枢機能の拡大を計り、主曲輪を中心とした放射状構造を採る内城を形成した。

②-南尾根部と本谷見付 s 構築による外城の南及び麓への拡張による戦時における兵力や物資の収容能力を増大させた。

③-山頂の主郭・西曲輪・南西尾根上の伝本城・伝平井丸・伝池田丸等の城域西部の総石垣化、及び東郭東虎口 e・f・g、権現見付 p、闕迦坂見付 r 本谷見付 s 主要虎口の石垣化を行なつたと思われる。

①の東曲輪・西曲輪の形成は観音寺城が山頂の主郭を中心とする単純な同心円構造を脱し、中心部の主曲輪を核とし、周囲に曲輪を放射状に配置することによつて求心性がより強化された城郭へと改変されたことを示している。

ここで興味深いのは西曲輪の存在である。西曲輪は織山山頂の主曲輪と、城主の日常生活の中心とみられる W 4 を結合する存在である。そして東曲輪と異なりほぼ全域が石垣化されている。主曲輪の正門はその間口が最大であることから西面する虎口 d とみられ、主曲輪と西曲輪は一体性が強いと考えられる。また主曲輪と W 4 を接続するのは完全に石垣化した削出土塁であった。

②について興味深いこととして、観音寺城の西方 2.5km に所在した金剛寺城との関連が在る。金剛寺城は六角氏当主の直率軍の 1 つである「金剛寺衆」が在城していたとみられる六角氏の軍事拠点である。金剛寺城は 3 期の変遷が追え、最大となるⅢ期の城郭構造は、内城と外城からなり、推定される全体規模は差し渡し 600m に及び、当時の平城としては県下最大とみられる<sup>141</sup>。

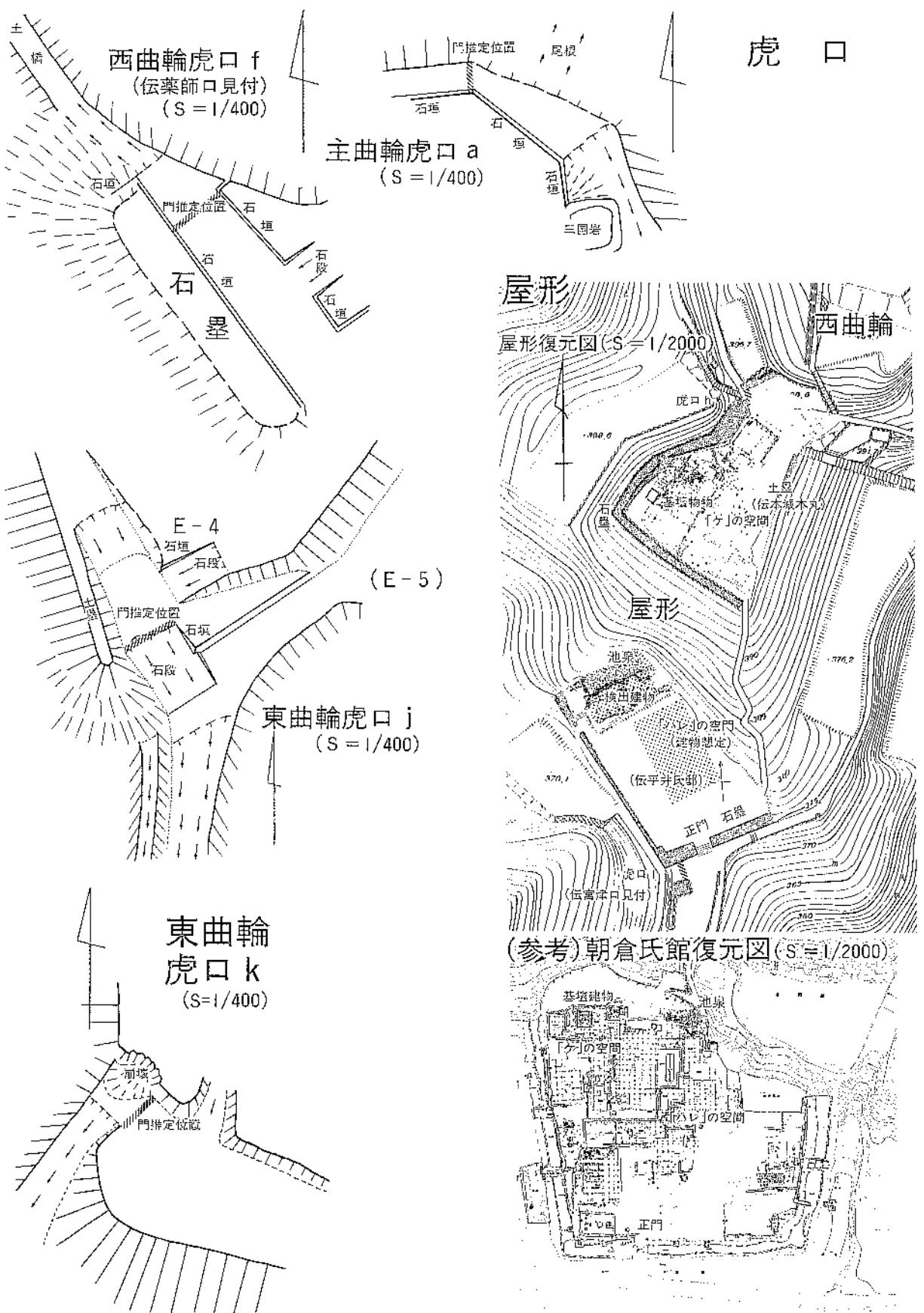
最近の研究で、金剛寺城のⅢ期は15世紀末から16世紀中頃迄の時期が充てられる可能性が指摘されている<sup>142</sup>。

このことは16世紀中頃に金剛寺城が、廃城或いは大幅に縮小された可能性を示している。では、この時金剛寺城に在城していたと考えられる「金剛寺衆」はどうなつたのであろうか。

可能性の一つとして、拡張された観音寺城に移動し、それまでの六角氏当主の親衛軍であった「御厩衆」に統合されたか、共に親衛軍として六角氏当主の両側を固めた可能性が考えられ、どちらにしろ観音寺城の城郭運用集団の中核を占める、城主六角氏当主直率軍の軍事力を嵩め、地域の軍事拠点としての観音寺城の地位を更に押し上げたと考えられる<sup>143</sup>。

西面石垣の形成について また城域西面の総石垣化が為されたことは西からの視線や侵攻に対応する必要性を迫られた結果とみることができる。

このⅡ期における西面重視は、観音寺城西方 2 の居住形態「常楽寺」の発展とも連動するものである可能性が考えられる。（後述）



虎口について 城郭の虎口は見付と伝えられるものを中心に、約15個所認められる。大規模なものは間口が6mに及ぶ。ただしいずれも平入が基本の虎口である。

虎口aは奥行きの有る虎口を形成していたとみられる。

虎口fは門推定位置の両袖が前面に突出しており、なおかつこれに上がる坂土橋と、門推定位置は、門前面で城道が喰い違っている。

虎口hはこの虎口のみ喰い違っている。

虎口jの北側には石垣が続き、門は石段の上に設けられていたとみられ、石段の部分に石垣から横矢懸かる。南面には石段と並行して張出し土塁が東に向かって延び、南からの視線を遮断し、虎口に奥行きを与えていた。

虎口pの権現見付は前面の城道に、横矢を懸けることのできる平坦面が確保されている

このようにII期の虎口では、虎口に奥行きを与えていたり、虎口や城道に折れを伴うものがあり、未成熟ながら虎口の構造には注意を払っていることをよみとくことができる。

「屋形」について（第3図） W4は「本丸」と伝承され、幅4mの城内最大の石段が取り付いており、屋敷群の中核を占めると考えられてきた。この尾根続き下のS1は、正門の間口が6mあり、両脇を巨石で固めており、外城の虎口である見付と同等の規模を有している。このことはW4が城内で最も格の高い屋敷地であることを示しており、伝承されるような一有力家臣の屋敷であるとは思われない。ここではこの2つの平坦地が上下に連続して位置していることを重要視し、2つの平坦地を1つの単位として捉え、単独の居住空間を構成していたと考えて、観音寺城主六角氏の「屋形」であると推定する。この構造を理解するために全面の発掘調査が終了し、ほぼその実態が明らかとなっている、一乘谷朝倉氏遺跡の朝倉館と比較の対象とする。もとより朝倉館は平地に立地する方形館であり、観音寺城のW4とS1は尾根を上に形成された平坦地であるが、大規模な礎石建物を中心に中小の礎石建物を配置すること、小規模な池泉を持つこと、基壇を持つ建物跡が検出していること等、類似点を挙げることができる。

ただし観音寺城はW4、S1は遺構の遺存状況が良好でない部分が多いため、両者に共通する部分の比較を行なう。

礎石建物－観音寺城W4、S1とも大規模な礎石建物の存在が推察されるが遺構面の依存状況が良好でなく、規模形状等を明確にすることはできない。これに対して朝倉氏館は「主殿」「常御殿」等に推測される建物跡が比較的良好に検出されている。

池泉－観音寺城ではS1の最奥、朝倉館では、「主殿」とみられる建物の北方に建てられた建築物と山裾の間に設けられている。

当時の武家殿舎は「ハレ」と、「ケ」に分けられていたとされる。「ハレ」は主殿を中心とする日常的な儀式・儀礼・執務を举行・遂行する空間で、更に「表」と「奥」にわかれる。「ケ」は当主の「常御殿」を中心とする私的な生活空間である。このなかで池泉は「ハレ」の「奥」に設けられる。よって、この池泉は「主殿」を中心とする「ハレ」の空間と、「常御殿」を中心とする「ケ」の空間の結接点近くの「ハレ」の空間側に所在するとみられる。規模はともに小規模である。

基壇状遺構－観音寺城ではW4西端近くから検出されている。広さは4m四方、内部に石を敷き詰め周囲を一段高い石で取り囲んでおり、内部の敷石面と周囲との高低差は0.18m弱である。基壇の覆土からは多量の炭片、基壇を中心に大量の磧、若干の瓦片が出土している。

朝倉館では居館（北西面を正面とする）の左手最奥に設けられ、5m四方の規模を有す。

以上のことから観音寺城の、池泉はS1とW4のほぼ中央、S1の最奥に位置していることから、S1が「屋形」の儀式・儀礼の中心であった「ハレ」の空間であったことを示している。よってこの上段に所在するW4は「ケ」の空間であったとみられ、「常御殿」を中心とする日常的な生活空間が展開していたものとみられる。

城下町「石寺」との類似性 観音寺城は、観音寺城南麓に拡がる城下町「石寺」との空間構造上の類似性を指摘することができる。

城下町「石寺」は観音寺城の大手とみられる「本谷」に設けられた居館を核とする集住形態である。

城下町「石寺」の中心は南面に高さ4mの石垣を用いた居館で、これを中央奥に配置する一辺5区画の区画割を復元することが可能である。これを居館該区画と呼称する。区画の一辺は約76mで、区画群全体の方位はN-15°-Wであり、老蘇から延びる道路が直接区画群内に導かれ、日吉神社の鳥居前を越えて観音寺城に向かう。日吉神社は区画群の北東隅に現在鎮座しており、鬼門を意識して設けられた可能性が考えられる。日吉神社は大字石寺の鎮守で、もとは十輪寺明神と呼称されていた。

この区画群の西面には濠状の谷が認められ、あるいは区画群の三辺が濠によって防御されていた可能性が憶測ではあるが推測できる。

この居館外区画群を囲繞して更に居住域が拡がる。これを周縁部としておく呼称する。ここに展開する遺構群は条里地制や地形に規制されたもので全体で統一的な地割は存在しない。また明瞭な外区画施設も検出されていない。

この外側にも地名やからみると鳥状に居住域が分布していたことが推測される。

ここで挙げた観音寺城城下町「石寺」構造と、観音城との構造は以下のようにおおまかに分けることができる。

A：石垣を集中的、規則的に用い、聖（神）所を組み込んだ部分

B：規則正しい地割を割り出した部分。

C：自然地形や条里地割など、周囲の状況に影響されて形成されている部分。

これらをそれぞれ対応する。

### 観音寺城 城下町「石寺」

- |        |         |
|--------|---------|
| A：内城域、 | 居館、日吉神社 |
| B：外城域  | 居館外区画群  |
| C：東部城域 | 周縁部     |

このように観音寺城と城下町「石寺」は同一の構造が山上と山下に重複して存在すると云える。この状況の可能性として以下の可能性を考えてみた。

①当初、詰城-観音寺城、城下町-石寺といった区分があったが、その城下町部分の上級家臣居住域が構造と共に山上に移植され、同一構造が山上と山下に併存するようになった。

②冬期において、観音寺城は極めて居住環境が劣

悪であったと考えられる。よって冬期における観音寺城の代替場所として「石寺」は機能していた。

③六角氏当主の主要な家系として氏綱系と定頼系が存在するが、上下をそれぞれが使い分けていた。

④山上と山下ではそれぞれ場の性格が異なっており、儀式や儀礼の性格に応じて使い分けていた。

等で六角氏家系の複雑性も相俟って明確な解釈は現在においては困難である。ただ①の場合、観音寺城にとって城下町「石寺」は東部域と同様の外縁施設群の一つに過ぎなくなっていたといえる。

## 4. 観音寺城を廻る状況

(文献史料との整合から)

### 一期

観音寺城の城郭としての初見は『碧山日録』応仁二年四月一日条に「西軍危寿之下竄聚江之観音寺」とあるにはじまる。このとき観音寺城は10日に京極勝秀によって攻め落とされている。この後度々観音寺城は六角龜寿（高頼）の拠点とされ、応仁・文明乱を通して周囲で激戦が繰り返されている。

### 二期

1523（大永3）年、蒲生氏の内訌に介入して日野城の攻略を終了して以後、1560（永禄3）年4～5月の肥田城攻略戦に至るまで六角氏の支配領域である湖東・湖南地域（以下江南）における合戦の記録は簡見の限りにおいて認められない。この間の37年間は六角氏の全盛期である。

観音寺城に六角氏当主以下の居住が文献上で確認できるのは『鹿苑日録』天文八年二月二日条に「虎上司従二觀音寺一上洛、霜台神左右二返事一二月旦日付也、四郎殿留レ山御留主之間…」とあり、霜台（定頼）は山下に居て合うことができたが、四郎殿（義賢）は山上の観音寺城に留まっており会うことができなかつたと報告している。また六角氏当主の居住地がここでは「観音寺」として認識されている。

次いで『鹿苑日録』天文八（1539）年二月九日条には円満寺齋了が観音寺城に登り、六角氏家臣神崎左京亮宅におちつき、この後「屋形」に赴き、定頼、義賢と対面し、大原宅で長田、水原、進藤、種村、馬淵ら六角氏家臣の主だったもの達と会っている。

十日には「屋形二階」で五献以下吸物を頂き、小

第4図 鏡音寺城Ⅰ期（16世紀中頃）滋山西方図 ( $S=1/25000$ )



林、奈良崎、小原が相伴している。

十一日には下山し、殿原衆の見送りを受け、深谷から下山しており、このことから、これらの施設や他の家臣の宅も山上に存在したとみられる。

また『宗長手記』天文十三（1544）年十月条に「観音寺登城」「座敷二階」、『東国紀行』天文十三年十月二日条にも「観音寺衆下山参會」とあり、16世紀中葉には山上に当主の「屋形」をはじめ、主だった家臣の「宅」が建ち並んでいたとみられる。

また敵山西山腹の柔實寺には亨禄四～天文三（1531～34）年の間、足利義晴の仮幕府が置かれている。また天文十八（1549）年には「石寺新市」文字がみえる。（『今堀日吉神社文書』）

天文二十一（1552）年、16世紀において六角氏の権力を確立した六角定頼が死去した。また弘治三（1557）年には定頼の兄氏綱の後継者で、近江守護を定頼に譲り、「江州宰相」（『鹿苑日録』）と呼ばれた六角秀長（義実）が没している。<sup>10</sup> ひとつの時代が終わろうとしていた。

### 三期（第f図）

六角の後継者義賢は、観音寺城西方2kmの「常楽寺」に江雲寺を建立しこれを定頼の菩提寺とした。「常楽寺」は湖東地域において最も内陸に設けられた湊を有し、水上交通と陸上交通の結接点であった。後の「下街道」はここにアクセスし、太平洋に面する伊勢の「桑名」から「八日市」に延びるルートは、更に「常楽寺湊」に延びていた。そして「常楽寺湊」から琵琶湖を渡って「今津」に至り、六角氏の息がかかった保内商人も通商権を持つ「九里半越」の先に在る若狭の「小浜」は、日本海航路の中に位置付けられていた。

またこの地域は日本の東国と畿内を結ぶルート上に位置しており、「常楽寺」は日本の中央で、日本の太平洋側と日本海側、畿内と東国を結ぶ十字路の役割が期待されていたものとみられ、ここに菩提寺を置いて「常楽寺」を六角氏当主が実効支配することによって、流通経路の掌握を意図したものとみられる。

この「常楽寺」周辺の現大字上豊浦・慈恩寺・小中には六角氏関係の宗教施設が多く存在している。小中には六角氏の氏神沙々貴神社が古くから鎮座し、一族の崇敬を受けていた。また常楽寺の地名は同神

宮寺の名によるとされる。また若宮八幡神社の神紋は六角氏の四目結である。若宮八幡神社に近接する六角山正念寺は弘治三（1557）年に六角義実が開基したと伝えられる。<sup>11</sup>

更に大字常楽寺の西、大字慈恩寺には六角氏の菩提寺慈恩寺・威徳院が既に建立されており、慈恩寺の遺構とされる淨嚴院樓門の解体修理の結果、この門が16世紀中頃に建立されたことが明らかにされた。また慈恩寺の西の小字金剛寺は、近江八幡市金剛寺に建立されていた六角氏の菩提寺金剛寺を16世紀中頃に移したものと想定されている。

このように「常楽寺」は六角氏色が強くなつてゆく反面古くからの常楽寺領主木村氏は16世紀初頭頃に野洲町北村に居館を移している。<sup>12</sup>

安土町豊浦からは「常楽寺」に伴うとみられる濠が検出されており、先述した金剛寺城の「金剛寺衆」が「常楽寺」に移転した可能性も考えられる。

以上を勘案すると「常楽寺」の規模は、豊浦の濠から正念寺迄が推測され、差し渡し1000mに及ぶかともみられる。

更に、「常楽寺」から西へ延びるルートは、慈恩寺北側を通り、16世紀初頭には存在していた大町（近江八幡市長田町）、六角氏の尼寺永明寺が所在した西庄に沿いながら、屈曲して延びている。この道路の方位は条里地割と若干方位を異にし、上豊浦から常楽寺付近の東西街路とほぼ同じであり、「常楽寺」内の街路を延長したものとみられる。

この一部は平成5年に淨嚴院の西で行われた発掘調査によって、条里方位の溝を埋め立てて、現在残る道路が形成されたことが明らかにされている。<sup>13</sup>

また「常楽寺」から沙々貴神社、更に常楽寺山に至る帶状の地域は、方位こそ条里地割と同じくするも、その土地区画は「常楽寺」から延びる道路によって規制されており、ここにも「常楽寺」の影響が認められる。

よって「常楽寺」から西に向かって方位を同じくして屈曲しながら延びる一条の道路に沿う2km、南東に向かって常楽寺山に向かって延びる長さ1kmの帶状の範囲が「常楽寺」の影響を受けた範囲といえる。

この範囲は西を六角氏の尼寺である永明寺が所在する西庄、南東が六角氏の氏神である沙々貴神社に

限られることから六角氏によって施工されたものとみられる。

このように観音寺城の西方2kmには、江雲寺や正念寺を中心として纏められた六角氏色の極めて強い観音寺城の外港菩提寺都市とでも呼称できる「常楽寺」が成立していたことが推測できる。<sup>130</sup>

よって観音寺城南西尾根の総石垣化は、六角氏の「常楽寺」の形成と連動したものとみられる。

「常楽寺」に面する観音寺城西方は観音寺城西面に延々と築かれた石垣に開けられた宮津口見付を起点とした道路に連なる「常楽寺」の疑似城下町化を強く推進していた表れとみられる。

これに対して城下町「石寺」は「石寺新市」・観音正寺の存在等が伝えられるものの、六角氏の菩提寺の存在などは伝えられておらず、観音寺城城下町と云いながら、六角氏色は「常楽寺」と比較にならない。ここに観音寺城城下町「石寺」と外港「常楽寺」の差がある。このことは16世紀中頃を境に観音寺城の性格が変化、或いは分化していったことを示すかも知れない。

つまり、観音寺城と城下「石寺」の組み合わせは、將軍によって改替されることが在り得る不安定な守護職を背景とし、実力を着実に地域に扶植しているが上級権力に従わざるおえない守護大名的な六角氏による江南支配の状況を示す。

これに対して顕著に石垣化された観音寺城西部城と「常楽寺」の組み合わせは、上位権力に頼らない武力・経済力を示し、これが六角氏当主に結集されることによって領国を六角氏当主の力によって強力に統治する体制の樹立を目的とした基盤造りとみられる。

観音寺城は当初、前者の城郭であったが、六角氏の成長に伴って権力構造が変化し、第二の性格が芽生えたことによって2つの性格が1箇の城郭の中に同居することになったと思われる。そしてこれを如実に示すのが、Ⅱ期にみられる西尾根部の総石垣化と、江雲寺・正念寺の建立による「常楽寺」の疑似城下化である。

そして第一の性格の克服が六角氏の課題となつたと考えられる。義賢は「常楽寺」の經營をも一環とした方策によってこれを緩やかに移行させようと考え

えていたが、三好氏の台頭等、周辺状況の緊迫に焦った義弼はこれを強引に推進しようとして観音寺騒動を起こしてしまったと思われる。

#### 四期

1563（永禄6）年10月の観音寺騒動以後、六角氏権力は内部矛盾が表出し崩壊してゆく。1567（永禄10）年に制定された「六角氏式目」は、六角氏当主の権力を制限するものであったことはこれまでに指摘されているが、翌年9月の織田信長による上洛によって家臣団が雪崩的に崩壊し、観音寺城に籠城することもできず、六角氏の湖東・湖南支配は終焉した。

しかし、六角氏自体は甲賀郡を基盤に執拗に勢力の挽回を画策していた。織田信長によって本拠を追われた勢力がこれほどまでに抵抗をみせた例は他に多くない。これは第2の性格への転換がある程度功を奏した成果かも知れない。

### 5. 大規模城郭観音寺城の空間構成

#### 1. 観音寺城の主郭

本稿では、これまでの観音寺城に対する評価に反して、山頂の内城を中心とした求心性の強い城郭像を提示した。ここでは観音寺城の主郭の性格を中心に考察してみたい。

観音寺城の主郭は発掘調査が全く行われていないため考古学的な手法によってその性格を明らかにすることはできない。そこでやや想像の域に立ち入るが、主郭の性格として以下の可能性を示す。

①定頼系当主の本館が存在した。②氏綱系六角氏当主の居館が存在した。③聖所として扱われていた。

①としては、W4・S1はあくまでも日常の居所であって重要な儀式は主郭に設けられた殿舎によって挙行された可能性が考えられる。

②としては、六角氏の当主としては現在認められている定頼・義賢・義弼の系統に対し、定頼の兄氏綱を祖とする系統の存在が古くから指摘されており、定頼系の上位に位置していたことが最近の研究で明らかにされている。<sup>131</sup>

この六角氏の名義上の当主である氏綱系の居所が主郭に存在していた可能性が考えられる。

③としては、観音寺城が立地する織山は古くから神体山として信仰の対象になっていたと考えられて

おり、観音正寺の建立もこれによるとみられる。山頂はこの聖所の中心として日常的には人間が踏み込むことが忌避されていた空間であった可能性が考えられる。

このうち①・②は六角氏における特殊事情で、これ以上明確にすることはできない。③については、16世紀の大規模な城郭、或いは集住形態で、同様の中心を持つものとして、上平寺城、小谷城、山科本願寺、河内高屋城等を挙げることができ、これらについて一般化が可能である。よって③について考察することが觀音寺城を理解する上で最も適当と思われる。そこで先述した近畿地方の大規模城郭を③の視点に沿って簡単にみていく。

1. 山科本願寺は、阿弥陀堂と教祖親鸞の御影を祀った御影堂が配置された御本寺を中心に、三重の防御線を同心円状に廻らす構造を採用する城郭寺院である。<sup>100</sup>

山科本願寺の中心は、その教義の中心を為す極楽往生を約束する阿弥陀仏が安置された阿弥陀堂、教義を生み出した教祖親鸞の御影を祀った御影堂に代表される聖所、そして極楽往生を現世で約束する教団（集団）の中心的人格で、教祖親鸞の子孫である門主が居住する部分で、これらは近接して配置されていたとみられる。

このように山科本願寺は2つの聖所に向かう求心力と、1つの教祖の子孫である中心的人格に向かう求心力を核として形成された大規模な集住形態で、単独では16世紀最強の結集力を誇る集団であったとみられる。

2. 上平寺城は、16世紀初頭に京極高清によって上平寺を利用して築造された。江戸時代の絵図と現状から、階段状に平坦化された最上段に設けられたのは京極氏の居館ではなく、聖所である上平寺の本堂と伊吹神社であり、京極氏の居館はこの下段に設けられている。<sup>101</sup>

3. 小谷城は城郭の中核部より高いピークに山王丸があり、ここに山王権現が城主の浅井氏によって祀られていたと伝えられる。またその東には浅井氏の主筋である京極氏が用いたと伝えられる「京極丸」があり、この反対側である西には、小谷城中心よりも高位に位置する「大嶽」から延びる尾根から

見降ろされる場所に「六坊」と伝えられる曲輪が配置されており、ここでも放射状に曲輪が配置されている。また「六坊」と伝えられることから仏教関係の施設である可能性が考えられる<sup>102</sup>。

4. 河内高屋城は主郭に前方後円墳である高屋築山古墳を充て、これを取り巻く高屋丘陵全体に土塁と濠を廻らせた当初は同心円構造の城郭である。伝承によれば城主は、古墳であることを理由に主郭に居住しなかったと伝えられ、これを裏付けるような絵図も見つかっている。更に後の改修により主郭を中心とした放射状の構造へと変化している<sup>103</sup>。

このように觀音寺城周辺の16世紀中葉以前に成立した大規模な城郭の一部は、主郭内に聖所等の宗教的施設を持ち、これを核とした求心的な構造を採用していることが指摘でき、人間集団の主従性原理の核となる当主の居所はこれより一段下がった別の位置に設けられている。

このように、大規模な城郭を運用する上ではその集団を維持していくに当って、主従性原理の他に超自然的な存在を背景とする必要があったと示す。しかも主郭に聖所が組み込まれていることは、軍事的側面においても、超自然的な存在によって主従性原理が補完されていたことを示していると考えられる。

これは中世都市の「鎌倉」が鶴岡八幡宮を起点に統合されて以降抱える、大規模な中世的集住形態に備わった要素であったとみられ、觀音寺城もその系譜に連なるとみられる。

また求心性の核となる対象は織山が有する、江南地域における聖所性と、城主を核とした主従性原理が入り混じった、両者が未分離の微妙なものであって、城主を中心として形成された真正近世城郭のような明快な原理を背景とするものではなかった。

これは山科本願寺が、仏と開祖親鸞を祀った堂の聖所と、開祖親鸞の子孫とを核とした、求心力の強い集団を形成し、近世城郭的な様相を多く表す城郭寺院を完成させることを可能にした背景と相通ずるものがあると思う。

ところが觀音寺城はこの要素の一つである「觀音正寺」を城外に出し、聖所を中心に持ちながらも、あくまでも城郭を中心とした大規模な集住形態であ

ることを選択した。このことは上平寺城や小谷城よりも近世に一歩進んだ様相を示すとみられ、河内高屋城に互すとみられる。

## 2. 地域において城郭を中心とした過去に類例をみない大規模な集住形態である

中世において大規模な集住形態は「京」「鎌倉」をはじめとして、社寺の門前町的な様相を呈することが多い。近江においても「坂本」等のように、主要な大規模な集住形態は社寺の門前町に限られている。

観音寺城出現以前に江南地域において居館を中心とした面的な最大の集住形態は、観音寺城の西方3kmに位置する慈恩寺館とその居館集落であった。

その規模は最大で差し渡し300m、観音寺城とは比較にならない規模である。

よって城郭を核として形成された、地域における中心的で大規模な集住形態として、観音寺城がこれまでには存在しなかった新しいスタイルの城郭であることはあきらかであり、或る意味で城下町を含めて近世的な性質と、規模を持った城郭であったことも指摘できる。

観音寺城の周囲には南麓の城下町「石寺」、観音寺城の下港で六角氏の菩提寺都市とも呼べる「常楽寺」等を従える広域の居住形態が形成されていたとみられ、観音寺城・城下町「石寺」は城郭を中心とした大規模な集住形態であるという点において近世城郭に伍する存在ではあるが、身分別住み分け等の要素を持つようには認められず、観音寺城を真正の近世城郭として評価することは不可能である。

しかし本稿で示したようにこれに先立つ、城郭を中心とする大規模な集住形態であること、近世を先取した存在として高く評価でき、縛張的にも近世性を目指した城郭として、真正近世城郭に至る過程の一端である先近世の城郭として評価することができると思う。

観音寺城に限らず、16世紀中頃の地域的中心城郭には大規模な集住形態を採用するものが多い。発掘調査によって或る程度内容が把握されているものとしても浪岡城（青森県）、八戸根城（青森県）、一乗谷（福井県）等の他、先述した小谷城や高屋城がある。

但し、浪岡城、八戸根城、一乗谷には中心となる

聖所は存在しない。観音寺城とは別の原理を加えることによって巨大さを維持したと思われ、いずれも如何に大規模な集住形態を日常的に維持し、「有事の拠点として機能させるか」と云う命題のなかでの選択であったと思われる。

観音寺城を含めこれらはすべて中世城郭として認識されているが、地域における城郭を中心とした大規模な集住形態として、近世的な観点からの考察も必要であると思われる。

そして、これが典型的な近世城郭スタイルとして完成したのが、16世紀第4四半期以降の真性近世城郭と云える。

真正近世城郭の属性としては、A：地域において他を超越した大規模な城郭であること、B：防御的に主郭を核とした構造であること、C：虎口や防御線の技巧化、D：身分・階層別の居住、等が挙げられる。

このうち観音寺城は、Aをクリアし、不十分ながらBの要素を持っており、辛うじてCの要素を有している。

よって、観音寺城をはじめとして最低限Aの条件を満たす、浪岡城以下の城郭は、(真性)近世城郭の先駆的形態として、先近世の城郭と呼称しておきたい。

## 6. 結語

観音寺城は城下町を含めた大規模な集住形態であり、16世紀の中頃、近江の江南地域ににこれを中心として、一時代が築かれたとみられる。

本稿においてはこれまでの通説と異なり観音寺城を含む、広い地域において卓越した規模を有する城郭を、当時としては、高い企画力、構成力を駆使した、求心性の強い、高度な防御性を誇る城郭である可能性を示した。

そしてその基本的な評価を中世城郭から分離し、その卓越した存在形態から近世城郭の魁として、先近世城郭として呼称することを提案した。

**謝辞** 本稿を為すにあたって、伊達宗泰先生、秋田裕毅、稻垣正宏、北村圭弘、坂田孝彦、横田洋三の各氏に貴重な御助言、御教示をいただきいました。文末ながら御礼申し上げるものです。

また観音寺城の縄張図については、『五個荘町史』第一巻付図の、村田修三氏の成果である図を最大限に利用させていただきました。

## 註

(1) 村田修三「観音寺城と中世城郭史」[五個荘町史] 第一巻  
1992

(2) 県教委「観音寺城跡整備調査報告書」 1971

(3) 県教委「観音寺城跡整備調査報告書」 1971  
安土町教委「安土町埋蔵文化財白遷調査報告書第33集  
安土城下町遺跡十七地区19次調査発掘調査報告書」  
2000.3

(4) 抽稿 県教委・県協会「ほ場整備事業関連遺跡発掘調査  
報告書 X X II ~ 6 金剛寺遺跡 金剛寺城遺跡」 1996

(5) 安土町教委「安土町埋蔵文化財白遷調査報告書第33集  
安土城下町遺跡十七地区19次調査発掘調査報告書」  
2000.3

(6) 「城郭運用集団」については抽稿「日本近世城郭の基礎構  
造」「花園史学」第一七号 1996 参照

(7) 小野正敏 「戦国期の館・屋敷の空間構造とその意識」  
『信濃』第46巻第3号 1994

(8) 抽稿 県教委・県協会「観音寺城城下町「石寺」の構造」  
『観音寺城跡』 2000

(9) 佐々木哲 「天文期六角氏系譜の研究 -六角氏綱の子  
孫の実在について-」『戦国史研究』第30号 1995

(10) 『滋賀県の地名』 1991

(11) 『野洲町史』第一巻 1988

(12) 県教委・県協会「ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書 X X  
III - 7 慈恩寺遺跡ほか」 1996

(13) 「常楽寺」の構造に関しては、発掘調査報告書が或る程度  
揃い次第別稿を立てる予定である。

(14) 佐々木哲「天文期六角氏の系譜の研究 -六角氏綱の子  
孫の実在について-」『戦国史研究』第30号 1995

(15) 福島克彦 「城郭研究から見た山科寺内町」／中井 均  
「[「戦国の寺・城・まち  
-山科本願寺と寺内町-」 1998

(16) 中井均・高橋順之 「上平寺城とその城下町 - 遺構と絵  
図からの再検討 -」『近江地方史研究』第29・30合併号  
1994

(17) 県教委「小谷城」『滋賀県中世城郭分布調査 7 (伊香郡・  
東浅井郡の城)』 1990

(18) 詳細は近く別稿を立てる予定である。

(19) 抽稿「中世における居館を中心とした集住形態について  
-安土町慈恩寺に所在する居館遺跡とその周辺-」『紀  
要』第13号 2000年3月

(20) 詳細は別稿を立てる予定である。

## 編集後記

今回は執筆者数が少なかったものの、縄文時代から中世までの論考、および平成11年度全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会で発表された基調講演をまとめ、文章化したものを掲載できました。

来年からは21世紀となります、これまで以上に文化財の調査・研究が行われ、世の中に「文化財の保護」の意識が広がっていくことを願っています。(T. S)

平成12年3月

## 紀要 第13号

編集・発行 財団法人滋賀県文化財保護協会  
大津市瀬田南大萱町1732-2

TEL(077)548-9780・9781

印刷・製本 宮川印刷株式会社  
大津市富士見台3番18号  
TEL(077)533-1241 FAX(077)534-0846